

私たちが守り伝えるもの

——願いに生きる—— 1

鎌仲ひとみ氏&長田浩昭氏対談 in 西勝寺

ご紹介のように推進員養成講座、半年以上かけて担当させていただきました長田浩昭といひます。同じ兵庫県の篠山市から来ました。

皆さんこんにちは、鎌仲ひとみと申します。今日はよろしくお願ひいたします。私は東京から来ました。生まれは富山県の氷見（ひみ）市というところす。うちも浄土真宗の門徒で、地元のお寺の門徒代表を父がやっております。月命日というのがうちの場合 6 回くらいありまして、75 年にわたる法要をずっと続けているもので、しょっちゅうお寺さんがうちにいらっしやって、こどものころからお茶を出したりして、浄土真宗という宗教の中にどっぷりつかって大きくなって、大学に行って今東京に住んでおります。私は映画を作っております、つい最近新しい映画「ミツバチの羽音と地球の回転」という映画を完成させました。これを明日姫路で上映していただきます。ということで今日は長田さんとお話しさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

私は鎌仲さんと会うのは初めてではなく、前回お会いしたのは3月の初めでした。ちょうどその映画を撮られた山口県の祝島という 500 人の人の住んでいる島があるんです。その対岸に上関原発という原子力発電所が新規に立地するというので、そのことに反対している島なんすね。3月に私も初めて訪れました。船で島に着いたんですが、目の前でカメラを回されているんです。誰が何のために…と思って見ると鎌仲さんだったんです。祝島で一晩呑みながらお話をさせていただきました。

それぞれの出会ってきたことを 15 分位話せということですので話させていただきます。今鎌仲さん氷見の出身だといわれました。実は私も北陸出身です。氷見っていうのは能登半島の付け根、わかりますか？こうやった親指が能登半島。富山県側で、私はそこを通り越してずっ

と先っぽの方へ行った先端の港町で生まれ、冬になると寒ブリをたらふく食べながら生きてきました。私は大谷派の寺の長男として生まれ、たまたま父親が21の時に急死しまして、やむおえず、しづしづ、寺の住職になるという道を選びました。私が京都の学校を出て能登に帰ってきたのが25の年でした。別に学校を出たからって親鸞聖人の教えがわかったというわけではない、でも何か寺というところでやれそうだったから帰って来たんですね。

そうこうするうちに同じ能登半島の先端に珠洲市というのがあり、私の母親のふる里なんです、当時は2万4千人の町でした。真宗大国と言われる地域です。その珠洲市の一つのお寺で親鸞聖人の教えの学習会が開かれていました。差別や戦争の問題を真正面に掲げながら親鸞聖人の教えを深く考えて行こうという場所だったんです。ある時その集まりで、10人くらいしかいなかったんですが、色んな人が集まっていた。その中でたまたま一人の人が、今度の市長選挙で、原発の反対を訴えて私たちも候補者を立ててみてはどうかと。自分たちが票を入れたい方にいれたいんだ。意思表示をしたいじゃないか、という軽いノリの話でした。

実は私はその頃原発のことなんてこれっぽっちも知ってませんでした。そして選挙立候補当日の朝、僕は寝ころんで野球を観ておったんです。そしたら電話がかかってきて、あんた暇なはずやろ、ちょっと手伝いに来たらどうかと言われたんですね。ところが正直私にはさほど関心事ではありませんでした。それより石川県の星陵高校の応援をする方が私には大事だったんです。でも断るわけにもいかず、野球を切り上げて珠洲市に向かったんです。

何をするのかなあと思っていたら、衣を着て選挙カーの後ろについて乗りなさいというんです。で、手を振れっていうんです。原発反対の候補者の車の後ろについて手を振れって。…でも本気じゃありませんで、きれいな海を見ながら回っている中で、一つのことにつっと気がつきました。それは、商店街に選挙カーが入っていった時に人が消えたんです。さっきまで立ち話をしてた人たちが消えて行くんですよ。どこへ行ったんだろうと思っていたら、みんな2階の窓のカーテンをちょっと開けて覗きこ

んでいたんです。それが毎日毎日続きます。原発反対の〇〇ですという声が聞こえた途端に街から人が消える。

私が小学校の頃金沢へ抜ける大きな道路ができました。以前は4時間半くらいかかっていたのが2時間半で行けるようになりました。あれは原発の道路やぜとこども同士でさえ話題になっていました。20 数年来に渡ってそういうことがずっと進められていた。その決着をつけるのが今度の選挙だと言われて、私はたまたま関わってしまいます。

20 数年間何が行われてきたのかといえば、町から人が消える。反対の候補に手を振った、頭を下げた、握手をただけで、実は様ざまな形で圧力がかけられます。たとえば市の職員である保育士さんが原発に反対らしいといううわさが流れたら、突然通うこともできない場所へ転勤になる。又反対だといえば、そこへ推進の親戚たちがその日のうちによってたかって、けしからんと圧力をかける。選挙運動の中で町から人が消えるという姿を見ることで、20 数年間にわたって、正直にものが言えない町になっていたんだということに気がつきました。(続)